「海と生きる」より良き未来を創造する公園， 「高田松原津波復興祈念公園」

Takatamatsubara Memorial Park, The park that creates a better future in harmony with the ocean

齊藤 恵理 Eri SAITO
乃村工藝社

1. 公園全体が学びに満ちた展示施設

筆者は「高田松原津波復興祈念公園」内に開設された展示学習施設「東日本大震災津波伝承館～いわて TSUNAMI メモリアル～」の展示設計に携わったものである。展示を設計する目から本公園を捉える時、公園そのものが多様な学びに満ちた展示施設であるということができる。ここには異なるコンテキストを持つ多様な学習資源があり、それらを優れた「実物展示」と捉えることができるのだ。本稿では、そういった観点からこの公園を紐解いてみたいと思う。

（1）本公園から見える眺望は、巨大な展示物

本公園は、高田松原地区の海沿いに位置している。このエリアは、津波襲来時、繰り返す押し波と引き波にさらされ、特に大きな被害を受けた場所である。

本公園に立つと、海側には全長約 2km、高さ 12m を超える防潮堤と気仙川河口に新設された水門を、山側には、かさ上げされた大地に今なお工事が進められている新市街地の広がりや、三方を山々に囲まれたリアス海岸特有の地形、市街地と海、気仙川、高台の位置関係を見ることができる。

この眺望は、私たちに、津波が襲ったエリア・被害規模の巨大さを体感的に教えてくれる。震災を乗り越えてゆこうとしている町づくりを、人々の創意と知恵を凝縮した実例として示してくれる。本公園を展示施設と捉えるのであれば、まず、この眺望こそ巨大な展示物であるといいたい。

（2）震災遺構～東日本大震災の事実・教訓を物語る～

本公園には、「陸前高田市東日本大震災遺構保存条例」により、「人命が失われていない」「復興事業に支障をきたさない」を条件に「奇跡の一本松」「陸前高田ユースホテル」「旧道の駅高田松原（タピック 45）」「気仙中学校」「下宿定住促進住宅」が、震災遺構として保存されている。旧市道の一部や砂畑踏切跡、川原川水門の土台なども遺されている。同じ敷地にこれだけ多くの震災遺構が保存されている所はおそらく他にはない。これらは元々あった場所で、概ね手を加えられることなく遺されており、実物が持つ

アリティの力で津波の高さや凄まじい破壊力などを理屈抜きに知らしめてくれる。また、震災遺構にはそれぞれに伝えるべき物語があるが、それらを通じてより深い学びへと私たちを導いてくれる。まさに東日本大震災を学ぶための優れた「実物展示」といえる。ここでは一例として「気仙中学校」について紹介してみたいと思う。

気仙川の河口沿いに位置する「気仙中学校」は、東日本大震災の被災地で最も海に近い中学校だった。あの日、押し寄せた津波は3階建て校舎を数分で水没させた。校舎の構造や外壁に大きな損傷はなかったものの、扉や窓は悉く破壊され、内部は、壁面、天井、床などが激しく損壊。津波の圧倒的な破壊力と脅威を物語っている。

地震発生時、86名の生徒は卒業式の合唱練習のため全員体育館にいた。教職員は異常な揺れに津波襲来を確信し、地震が収まるのを待たずに避難を開始。200mほど先の避難場所に、地震発生からわずか12分後に避難を完了。さらに気仙川の水が見る間に引くのを見て、より高くより安全な所へと2度にわたって移動。生徒・職員全員が無事だった。

「気仙中学校」は、防災講話や避難経路の検証、避難訓練等に力を注いできたという。津波に備えた活動が「全員無事」に導いたといえよう。本震災遺構を通じてこうしたエピソードを伝えることができる。津波の脅威だけでなく、日頃の備えが命を守ることを物語ってくれる。防災学習に資する優れた「実物展示」ということができよう。

（3）復興遺構～復興町づくりの足跡を伝える～

本公園には「復興遺構」と呼ばれるものも存在する。

東日本大震災で甚大な被害を受けた陸前高田市が、市街地強靱化を目指し被災地最大規模の高さ約10mのかさ上げ工事を行ったことは広く知られている。この工事では早期復興を目指し巨大ベルトコンベアと、それを気仙川をまたいで渡す吊り橋が建造され、2014（平成26）年3月末から2015（平成27）年9月まで、高台の宅地造成で生じた土砂をかさ上げ予定地に運び続けた。運んだ土砂はかさ上げに必要な1200万㎡の約4割にあたる500万㎡。10t

トラックで9年かかるところを約1年半に短縮したという。

吊り橋は「希望のかけ橋」の愛称で親しまれ、大規模設備を導入した災害復興工事は、世界でも稀にみる試みとして注目を集めた。その現場を一目見ようと多くの人々が訪れ、観光資源としても一役買ったという。

2016（平成28）年、役割を終えた吊り橋とベルトコンベアの解体が始まると保存を望む声が上がリ、これらを足元で支えた基礎の一部が保存されることとなる。これが本公園に保存された復興遺構である。全体からすればほんの一部分ではあるが、復興まちづくりの記憶を継承するものであり、「安全な町をつくる」「一日でも早く市民が戻れる町を再生する」という強い意思の証でもある。

（4）防潮堤～今後どう海と共存するのかを問いかける～

高田地区の海岸線に、高さ12.5m、全長約2kmの防潮堤が建設された。その一部が本公園に取り込まれている。これもまた本公園の貴重な「実物展示」だといえる。

この防潮堤の12.5mという高さは、東日本大震災規模の津波を防ぐことはできない。この高さは、発生頻度は極めて低いが発生すれば甚大な被害をもたらす最大クラスの津波ではなく、それより発生頻度が高く津波高は低いものの大きな被害をもたらす、11.5mクラスの津波に耐える高さとして算出されたものだ。最大クラスの津波には、ハード・ソフトを組み合わせた多重防御で対応するとしている。

防潮堤の高さ設定は簡単なことではない。津波防災だけでなく、沿岸漁業や観光、海との関わりから育まれてきた生活文化、生態系への影響等を踏まえた多角的な検討が必要だ。東北の被災地では、海への視認性が遮断されることへの懸念、漁業用地の確保、海水浴場・景観の保全等を重視する考えから、高台移転やかさ上げ等の別の対策を強化するなどして、防潮堤の高さを、国が提示した数値より低い高さ、被災前と同じ高さにした地域も少なくない。

防潮堤のあり方を考えることは、津波防災だけでなく、その町の将来をどう描くのかを考えることでもある。自然災害の多いわが国では、古くより厳しい自然を生き抜く知恵を育んできたが、防潮堤のあり方は、これから海とどう共存していくのかを私たちに問いかけるものでもあるのだ。

（5）高田松原～海とともに生きてきたことの証～

東日本大震災で消失した高田松原。高田松原は、陸前高田に生まれ育った人々にとって大切な原風景の一つだ。現在、本公園ではその再生を目指して植樹が始まっている。

高田松原の歴史は古い。この辺りは潮風や砂塵、高潮の被害が絶えなかったことから、高田村の豪商菅野空之助が私財を投じて防風・防潮林としてマツの植林を始めたのが江戸時代の1667（寛文7）年、さらに1725（享保10）年には今泉村の松坂新右衛門が同じく私財を投じて植林に取

組み、高田松原の原型が築かれたという。

その後、明治三陸地震津波、昭和三陸地震津波、チリ地震津波が陸前高田を襲ったが、高田松原は、これらの被害軽減にも効果を発揮したと考えられている。そして、津波被害を受ける度に地域の人々によって植栽が行われ、大切に守り育てられてきたことで、約7万本にも及ぶ見事な松原に成長。国の名勝にも指定され、多くの人々に愛される場所になったのである。

高田松原は、陸前高田の人々が度重なる大災害に見舞われながらも、創意・工夫を重ねて困難を乗り越え、この地で海とともに生きてきたことの象徴的存在である。現在、文字通りゼロからの植樹が進められているが、被災前のような姿になるまでには50年の歳月を要するという。

この地で海とともに生きてきた人々の歩みと、多くのものを奪い去った東日本大震災の記憶と、それでも未来を拓こうとする人々の想いを語り続けるのが、この再生しようとしている高田松原の姿なのだ。

（6）「海と生きるより良き未来」を創造する公園

以上、本公園を展示施設と捉え、そこにあるいくつかの「実物展示」を概観した。本公園は、東日本大震災の記憶を継承するに留まらず、津波から命を守るための教訓、海と生きてきた先人の営み、東日本大震災を乗り越えてゆこうとする人々の足跡を学び、継承する場だといえる。記念碑的な存在であるだけでなく、「海と生きるより良き未来」に向かってふりかえり、考え、学び続ける場なのだ。

東日本大震災被災地に多数遺された震災遺構のうち、唯一「未来への希望」を表象する「奇跡の一本松」。「海と生きるより良き未来」の創造を本公園の主旨とするならば、「奇跡の一本松」は、未来への希望を示すまさに本公園のシンボルといえるのではないだろうか。

2. 終わりに

本公園には、展示で括れないものがある。「追悼広場」と「海を望む場」だ。公園中央を山側から海へと貫く「祈りの軸」が、私たちを「追悼広場」へ、そして「海を望む場」へと導いてくれる。失われた命を記憶し続ける、そして海と対話する。そうか、これが本公園の骨格なのだと思う。「高田松原津波復興祈念公園」が50年、100年の時を越えて、人と海をつなげ続けてくれることを願う。

引用文献

- 1) 大西歩実・北林雅洋（2016）：東日本大震災津波被災小・中学校の実地調査に基づく避難のあり方に関する研究：Kagawa Univ. II, 6(6 2016), 33-70
- 2) 岩手県（2011）：岩手県沿岸における海岸堤防高さの設定について（第2回）、1-17